

ポスト天スギに向けた高齢級林分の成長過程の一考察

東北森林管理局 森林整備部 資源活用課 ○齊藤 雅哉
(元 米代西部森林管理署)
米代西部森林管理署 地域技術官 谷地 真梨佳
森林整備官 木村 良兼
森林整備官 畠山 大樹

1 課題を取り上げた背景

成熟した高齢級秋田スギは、天然秋田杉（以下、天スギ）の代替材として期待されるほか、「※あきたの極上品」としてブランド化もされている。

しかし、全国的な認知度はまだ低く、ブランド力の向上に向けた取組が必要である。

※商品規格…原木（林齢：80年生以上 長級：4m 径級：36cm以上
品質：日本農林規格で1等～3等に該当するもの）

2 取組の経過

ブランド力向上のためには、市場のニーズに合った品質の商品を安定的に供給・流通させることが重要と考える。そこで、当署管内における製品生産事業請負を実施した高齢級林分3箇所（①林齢89年生、②92年生、③116年生）を対象として、林齢の違いによる品質への影響を調べることにした。施業方法として①及び②は、100年生で伐期となる長伐期施業群、③は150年生で伐期を迎える超長伐期施業群となっている。以下に調査方法を示す。

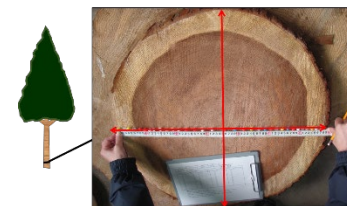
(1) 原木需要者へのアンケート

需要者の声を聴き、市場のニーズを調べるため、調査地①～③の林分から生産した原木をせり売りを行っている銘木市場に出品し、購入した方々を対象としてアンケートを実施した。

(2) 立木の年輪解析

調査地①～③の林内における間伐対象木を、上層木・中層木・下層木と

3区分し、その中からそれぞれ3個体選出のうえ年輪解析を実施した。解析は、立木の根際付近から採取した輪切りの円盤で年輪の中心を通る最長及び最短の円直径を定め、4方向の年輪を数える形で計測した。



(図-1 年輪解析の方法)

※上層木…林冠を形成 中層木…下層以上上層未満 下層木…被圧木

3 実行結果

(1)のアンケート調査の結果、原木を購入する際の品質の判断基準として、需要者の9割が「目詰まり」と「色合い」と回答した。また、購入した原木から製材されたものうち4割は建具材であり、製品の出荷先からは高評価を得ていた。中でも調査地③の原木から製材された商品は「準天然秋田杉」と称されるほど高評価を得た。

(2)の年輪解析では、年輪幅が0.3cm未満で推移している原木を良質材と定義（桜井ら(2002)長伐期林の実際）し、上層木から下層木の成長幅を調査した。結果は、①及び②の上中層木が目荒で下層木のみが良質材となっていたのに対し、③では上層木から下層木まで全てが良質材であった。

4 考察

年輪解析により①及び②の上層木が目荒になった原因として、間伐時に抜き過ぎて肥大成長したことが考えられる。この肥大成長の影響は、市場の原木落札単価にも表れており、①<②<③の順で高値がつく結果であった。そのため、高値となった③の立木成長を目安基準とし、立木密度管理を徹底した施業を行うことで、ニーズに合った品質の原木を供給出来る。また、良質材生産の適地を選別し、施業方法を超長伐期施業へと移行していくことで更なる安定供給にも繋がると考える。今後も継続して「あきたの極上品」のブランド力向上へ取り組んでいきたい。